

Title	沁み透る寂寥 : 生所への手記として
Author(s)	辻, 明典
Citation	臨床哲学. 13 P.107-P.115
Issue Date	2012-03-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/7493
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

沁み透る寂寥

——生所への手記として

辻明典

哲学を表現する方法はどれだけあるのだろうか？理路整然とした論文の中に留めおくことはできない哲学のエッセンスが、どこかにあるのではないか？もしあるとするならば、いかなる文体がそれを表現できるだろうか？本文の目的はエッセイで哲学を表現することである。筆の赴くままに綴った拙文の端々に、哲学のエッセンスを滲ませようと試みた。つらつらと書き綴った随想の隙間で見え隠れする哲学のエッセンスを、垣間見ていただければ幸いである。

哲学とは、それぞれの哲学者の人間的な所産であり、哲学者は、他の肉と骨の人間に向かって話す同じ肉と骨の人間なのだ。彼が何をしようと勝手だが、理性のみで哲学するのではなく、意志、感情、肉と骨、魂のすべてと肉体のすべてをもって哲学するのだ。要するに、人間が哲学するのである。

——ミゲル・デ・ウナムーノ『生の悲劇的感情』

予定よりもだいぶ早く大学に着いた。今日の用事を済ませた後の約束が、この日の一番の楽しみだった。旧友との再会。消防署に勤めている彼は、昨日から東京に来ている。友人と久闊を叙す自分の姿を思い浮かべながら、私も大人になったのかと心の中で嘯いた。3月といえどもまだ肌寒い日々が続いていて、私は缶珈琲をぎゅっと握りしめて悴んだ指先を温めていた。プルタブに指をかけ、ゆっくりとベンチに腰を下ろした瞬間、私は係留した船の上に誘われたかのような錯覚に襲われたのだ。足元が波打ち、その振動が冷氣とともに私の背中を駆け抜けていく。私は小刻みに揺れるベンチの上から、悲鳴とともに構内から逃げ出す人の姿を見た。その瞬間、私の意識はあっという間に海上から戻されたのだが、今度はもっと大きな揺れが私たちを襲ったのだ。

あの日から、私の世界は崩れ始めた。私の前には、昨日までとはまったく違う世界が広がっているようだ。あの日、帰宅する術を失った私たちは大学の一室に泊まることとなる。眠れぬ夜。目を瞑るも安息は訪れず、海水にのみ込まれた人たちの姿ばかりが目に浮かぶ。北泉海岸から数キロしか離れていないあの家に住んでいた老人は、我が家の瓦を拾って

ただけなのだ。私たちの足元は激しく揺れた。だが、まさかあれほどの大波がここまで迫り来るなど、誰が思い浮かべただろう。そこは静かな場所だった。猛暑の夏も潮風が私たちを涼ませ、秋を迎えれば頭を垂れた稲穂が広がる。阿武隈の山々が雪を遮る冬を越えれば、穏やかな春が訪れる。今やそこに広がっているのは、溜め息すら響かぬ場所だ。明日になれば、何事もなかったかのように曙光が水平線を紅く染め、日の光が阿武隈の彼方へと沈めばこの町にも黄昏が訪れるだろう。浜佐浜の向こう側へ広がる境界は、子どもの頃から飽きるほど眺め続けた。今となっては、その境界の向こう側が恨めしい。此处はよく出掛けたはずの場所なのだ。海際に佇んでいた家々の彼方からは、轟音とともに見上げるほどの海水が訪れた。嗚呼！

暗闇の中で無数の人々が徘徊する都心。突然訪れた非日常を享受したのか、杯を酌み交わしながら狂気を演じる学生たち。彼らの姿を横目に、私は垂れ流しにされた悲劇を直視しながら、ひとり呆然と連絡のつかぬ人たちの命を案じていた。まるで薄水を踏むような思いで幾度も受話器を右耳に近づけるも、その向こう側からは何も聞こえない。

丑三つを過ぎたころだろうか、座椅子の上でまどろんだ私は、見覚えのある場所へと誘われていた。真っ暗で何も見えないが、私はあの場所にいるのだと瞬時に理解した。此处に最後に足を運んだのは、四年前だったろうか。ただ四年前と違うのは、土と潮が混じり合ったとでも言うべきか、言葉では表現し難い臭いが鼻につくことだ。一步踏み出した私の右足の延長線上には、人影の消えた集落が広がっているらしい。そして私の背中には風を迎えた海が広がっていて、その底には名も知らぬ人の肉体が転がっているのだ。戦慄は静かに、そして確実に此の場所へと降り注いだ。静寂に支配されたこの場所にも、もうすぐ日の光が当たる。明日には漆黒に覆われた惨劇が暴きだされ、止むことの無い嗚咽がそこに満ちるはずだ。

寝ても覚めても悪夢は終わらぬ。朝焼けとともに目を覚ました私は、ふと旧友の姿を思い浮かべた。再会を約束したはずの旧友は、凍てついた恐怖が漂う故郷へと向かっている。夢を結んだ私が誘われた場所は、彼が急ぐその向こう側にあるのだ。そこは死の恐怖と隣り合わせの、私たちが生まれ育った故郷だ。避難区域は拡大し、溜め息さえこの場所には響かぬようになった。戦慄が広がる世界に残されてしまった人のために、彼は踵を返したのだ。あの日、彼は何を思ったのだろうか。私にはまだ、それを聴く勇気さえない。

私の前にも、私の後ろにも、絶望が横たわっている。あの日、私たちは気づいてしまったのだ。自分はなぜこれほどまでに冷酷な存在なのか、と。私たちは全ての悲しみを受け

とめることはできない。そんなことをすれば私は忽ち崩れ去ってしまうだろう。遠く離れた場所に住む人に降りかかった絶望など受け入れられない。遙か彼方に絶望が降り注いだとき、我が身に降りかからなくてよかったという安堵が一瞬だけ脳裏に浮かんだことを、私は思い出していた。私たちは冷酷な存在なのだ。あの日から、腹の底に横たわっていた冷酷な自分が目を覚まし、私たちをじっと見つめている。私たちは、私たちが冷酷な人間であることに気づいてしまったのだ。

残された私たちは生きていかなければならない。そして、私は問わずにはいられない。私たちはこのような世界に生きなければならないのか。私たちは暴走を重ねたあの原子力発電所の傍らに身を寄せている。多くの友人たちは帰る場所を奪われた。慙愧の念とともに故郷を後にした人たちに、私は何と声をかければよいのか。かつて夢とまで謳われたエネルギーは、あの日を境に悪夢の象徴にまでその地位を貶めることとなったのだ。私たちの日常はいとも簡単に、そしてあまりにも理不尽な形で奪い去られた。傷ましいほどもなく、戦慄と背中合わせだった私の日常。

まだ原町に住んでいたころ、Kという男性が私たちの先生だった。ある日、Kは私たちに、ここから30kmほど離れた原子力発電所の危険性について訥々と語り始めたのだ。有事の際にはできるだけ遠くへ逃げなければならない。そのためにも高速道路が必要だ。原町には高速道路が通っていない。おかしなことに、原子力発電所がある富岡までしか高速道路は通っていないのだ。いつもより熱心なKの言葉を、私たちはいつものように聞き流していた。それどころかKの授業の数日後、私たちは原子力発電所に就職を決めた友人たちを祝福したのだ。よかった、おめでとう。これでずっと、この場所に残れるな。私は大学に通うために原町を離れ、彼らはずっとこの地に残ることを選んだ。私たちを取り巻いていた日常を、自明の理として受け入れていた。

私たちが戦慄と背中合わせの日常に身を委ねていたなどと、誰が考えていたのだろうか。過去から現在にかけて私たちの生き方が私たちの預かり知らぬ因果によって制限され、それらが私たちを引き裂きつつあったという事実は、あまりにも見事に見過ごされていたのだ。私たちに連帯などなどなかった。私たちは既に、引き裂かれることになっていたのだ。私たちは、私たちの知っている生き方にのみ、自らの生き方を重ね合わせようと試みていた。きっとどこかで私たちは、正しく秩序づけられた世界を思い浮かべている。そして、それは範例の特定や記述に依存している。しかし私には、私たちを取り巻いていた世界は歪んでしか見えない。捻転に捻転を重ね、ついには歪んでしまった私たちの故郷は、もは

や修復すら困難な状況へと追い詰められていた。

学歴と職業が私たちを引き裂く

自分が生まれ育った場所についてではあるが、何を綴ればいいのかだろうか。ここまで書いても、まだわからない。ただ言葉を綴るたびに、私の内側に何か重たいものが積み重なっていく気がしてならないのだ。内側に溜まった垢を言葉に託して吐き出すために書き始めたはず。だが綴るほど私の腹の底には、黒々とした鉛の山が築かれていく。最近は吐気にも似た感覚が咽喉元に留まり続けていて、日を重ねるごとに私から生気を奪おうとしている。

原町。そこは家族や親戚が根付き、親しい人たちが住んでいる場所だった。鬱陶しくもあったが、愛おしさも感じる場所。人影のない市街地を少しだけ離れば、そこには一面の田畑が広がる。拙文を読まれている読者諸氏は、この土地の人の生業とは大地にしがみつくとことだと思われるだろうか？そうではない。それはここに根を下ろす人がよく知っている。多くの農民にとって、土を耕すことは片手間ではない。農民でありながら、田を鋤くことが片手間とは何と残酷なことか！このような冷酷な仕打ちを彼らが受け続けてきた現実を、読者諸氏はいかにお考えか？田畑を父祖の土と敬いつつも、過ぎ去ろうとする時間は冷酷だ。先祖から受け継いだ場所にしがみつき、それだけを頼りに生きろと誰が言えよう。この町の現実はいかに傷ましい。どれだけ土が潤おうとも懐は寂しく、今日もまた一人、荒れ果てた土を耕すことを止めるといふ。その人は充血した眼に涙をためながら、右手で鼻をつまんだ。田畑と潮が入り混じった臭いは耐えられぬ。

原町から通学可能な高等教育機関はほとんどないといってよかった。高校を卒業すれば、私たちは故郷に根を下ろす覚悟を決めるのか、県外に生活の糧を求めるのか、それとも親元を離れて進学するのかわを選ばなければならない。現実を見つめなければならぬ。自分の故郷に根をおろすという選択肢が全ての人に開かれているとは言えないのだ。私たちは学校を出る前に、この冷酷な現実と向き合わねばならない。卒業を機にほとんどの若人は進学や就職のために故郷を離れ、盆と正月にだけ帰省するという生活を送りはじめる。それは私にとっても例外ではない。これは誰にも揺るがすことのできぬ現実である。

私たちは既に引き裂かれていた。私たちは学歴によって引き裂かれ、職業によって引き裂かれる。生まれ育った故郷に腰を据え、そこの産業を支えるのは実業高校の卒業生がほとんどだ。しかし、地元で働くことを強く望んだとしても、全ての希望者が残れるわけで

はない。卒業後に就ける職種も限定されていて、福島の外側に職場を求める者も多かった。

比較的優秀な若人ほど、高校卒業と同時に都市部の大学や専門学校へ進学するために故郷を離れていく。そして大学や専門学校を卒業する時期が近づくにつれ、私たちの頭には懐かしき故郷の姿がふとよぎるのだ。故郷に職を求めても、そこにあるのは数えるほどだけ。ほとんどの若人はどれだけ強く望んだとしても、自分の故郷に根付く術を持つことができない。私の高校の同級生のほとんども、高校卒業と同時に故郷を離れた。300人近くいた同輩の中で、相双と呼ばれるこの場所に根付いた人は、両手で数える程しかないはずだ。同輩のほとんどが都市部に就職し、故郷には盆と正月にだけ戻るといった生活を続ける。

なんたる皮肉か！学校的知識の推奨は、若人を故郷から駆逐するのだ！腰を曲げた老夫婦が田畑にしがみつく姿から目を背け、私たちは学校という場所で醸成された知識を内側にため込む。知識は私たちを故郷から追い立て、学校はそれを推奨した。私たちは、寂れた街並みに一瞥すら示さなかった。

原ノ町駅から続く目抜き通りは寂れに寂れ、堅く閉ざされた鎧戸ばかりが並んでいる。いつか見たモノクロの写真には、かつての繁華街の姿が残っていた。だがそんなかつての姿を、私たちは思い浮かべることすらできない。故郷のかつての賑いを知らぬ私たちは、閑古鳥が鳴く中心地を足早に通り返り、その傷ましさを目を背け続けていた。祭事を迎えると此処が賑わいを取り戻すことが僅かな救いだが、それも一瞬の気休めでしかない。なんと人間性を欠いた姿であろうか！学校的知識の下で、私たちは噴き出していたはずの無数の悲劇には一瞥もくれない。私たちは冷酷であれと教えられてきたのか！だとすれば、何と冷酷で人間性の欠片もない悲劇であろうか！学校的知識を無批判に受け入れ続けるよう促される一方で、歪んだ故郷の姿を直視せよと教わることはほとんどない。この歪んだ故郷の現実に一瞥すら示さず、我々は勉学に励み、そして大学へ進むというわけだ。教育という免罪符の下、捻じ曲げられた現実矮小化され続けてきた。矮小化された現実は放射線によって化学反応を起こし、憎悪と嘆き声を伴って可視化された。何かがおかしい。何故こんな歪んだ世界に、私たちは生き続けなければならないのか。

学校的知識は私たち、苦しみで喘ぐ故郷の姿から目を背けさせようと仕向けるのだ。挙句の果てに、学校的知識は私たちの耳元で故郷から離れろと囁き、私たちは四分五裂される。誰にもこの現実を問いただすことなどできなかった。かつての私たちは、自分たちが引き裂かれようとしている事実を、決して揺らぐことのない現実として受け入れていた。

卒業と同時に故郷を離れ、大学へ進学する、あるいは福島県外の企業へ就職するという選択は、個人の願望の帰結ではあるかのように見えるだろう。しかし、それは私たちが知っている人生のあり方に、私たち自身を適応させたものでしかない。私たちには極めて限られた選択肢しか与えられておらず、それは自明のもと見なされている。匿名の嘆き声が渦巻いていたとしても、それは教育という免罪符の下で過ごす子どもたちの耳には届かない。

きっと私たちは、子どもの頃から薄々と気づいてはいたはずだ。私たちが学歴によって引き裂かれ、職業によって引き裂かれつつあるという、この由々しき現実。しかし気づいていながらも、自分たちが引き裂かれつつあるというこの現実を、誰かとともに考えたことなどなかった。学校の外の呻き声は、予め聴くに値しないものとして排除されていた。たとえそれらの呻き声が、過去から現在にかけて続く、私たちの与り知らぬ因果関係に起因するものだったとしても。それによって私たちが、絡め捕られていたとしても。この揺るがすことさえ困難な現実は、「受験」「進学」「就職」といった言葉の影で矮小化され、そして忘却される。

戦慄と断絶

福島第一原子力発電所の事故を契機として、この場所に住む人たちは、これまで以上に引き裂かれようとしている。20km圏、30km圏といった同心円状上のライン、あるいは計画的避難区域、特定避難勧奨地点といった枠組みによって機械的な線引きがなされ、まるでその枠組みの中には触れることもできない問題が横たわっているかのように、「汚染地域」といった概念が形作られていく。

外側から私たちの故郷を窺う人たちは、同心円状にくくられた全ての地域や〇〇区域に設定された全ての地域を、深刻な放射能汚染が進行している地域であるとみなすのであろうか？読者諸氏はいかがか？20km圏内の警戒区域内であっても沿岸部には、放射線の値が低い地域があるという。比較的放射線の値が低い地域であっても、なぜ避難もせずそこに住む人がいるのかを理解できない人も多くいるだろう。平常時の放射線の値と比較すれば高くとも、そこに根をおろし続ける人がいる。全村避難となった飯館村には、まだ操業を続ける工場すらある。

当然のことながら、様々な人が其処には根を下ろしている。地図上に機械的に引かれたラインによって形づけられた地域の中には、重大な問題が隠匿されているかもしれない。

放射線に汚染された地域は点在していることは理解しつつも、それがどのような色合いを見せているのかははっきりとは見えない。見えない放射線は測定器によって数値される。それが身体に与える影響を予測し、恐怖することによって問題が語られ、ときにそれは独りで歩みはじめる。それらを受け取る側の態度も多様なのだ。私たちはすべてを語りつくせる言葉を持ち合わせていない。

ここで私の友人たちの話をさせてもらえないだろうか？どうかお付き合い願いたい。兼業農家に生まれたAは農業高校を卒業し、小高にあった会社へ就職した（この原稿を書いている時点で、南相馬市小高区は警戒区域に指定されている。誰もそこに住むことはできない。）。Aにとって、低線量の被曝はそれほど気になるものではない。震災直後、Aの住む地域は屋内退避区域に指定された。外出する際はマスクをつけ、可能な限り肌の露出を避け、玄関前で放射線を払ってから家の中に入るよう指示があったときも、Aはそんなことは気にせず家の外で弟と白球を投げ合っていた。

放射能に汚染された外気を家の中に入れないよう指示があったが、Aの家ではエアコンをつけていた。Aは震災後のストレスを軽減することの方が、被曝量を軽減させることよりも重要だったと語る。震災直後、同心円状に括られた避難区域の外側に住む市民たちに、県外に避難所とそこへ向かうバスが用意された時も、Aはそこへ行くことを拒んだ。Aの家は幸いにも地震や津波の被害を受けておらず、食糧も十分に残っていた。知覚できぬ恐怖が蔓延しつつある中でも、Aはそれを自分自身の身体を脅かすものとみなそうとはせず、見ず知らずの人たちと見知らぬ土地で生活をしようとはしなかった。

もう一人のある友人は、生まれたばかりの愛息の行く末を案じている。彼は放射線を恐怖している。原町にあった家を引き払い、遠く離れた町から長い道のりを二時間近くかけて職場に通うことを選択した。彼は我が子を、可能な限り放射線に曝したくないと思っている。農家に生まれた彼は、両親に「孫の顔を見せるため」に帰郷しても、実家には宿泊しないという。実家付近の放射線量は比較的に高いらしい。実家でできた米も、福島県産の食品も、自分は食べても子どもには絶対に食させない。我が子のことを考えると、今後の仕事を如何にすべきか、悩み続けている。

あの日以降、原町に住む人たちは放射線と付き合いざるを得なくなった。放射線の影響を考慮したうえで、何らかの生き方を選択しなければならないという事実、私たちは直面している。私たちは溢れだした情報の中で悩み悶え、放射能と付き合い最適の方法を編みだそうと試みる。だが、私たちの目の前に横たわる選択肢は過去からの連続性の中に埋

没しており、非常に限られたものしかそこには残されていない。Aはこれからも生まれ育った原町で暮らしていこう。兼業農家に生まれたAは、これからも土を耕す。放射能と付き合わないという選択肢は、Aには存在しない。それは私たちが意識的にコントロールした結果でもなければ、そこに住む人たちが意図的に実行可能な選択肢を狭めた結果でもない。それは、私たちが選択できないような因果関係によって生じている。

放射線は私たちの世界に境界線を生み出した。そして、その境界線の上は灰色に染まっている。灰色は滲みながらジワリと広がり、その境目を曖昧にしていこう。境界線のすぐ向こう側に広がる町。あの場所には、あの人の家があった。初盆を迎えたあの日、あの人は薄く滲んだ墨で塗られた境界線の上に立ち、此処からすぐそこにあるはずの墓石を脳裏に浮かべながら掌を合わせていた。私は思わず声をかけようとしたのだが、強い南風がそれを遮った。風が通り抜けた首筋が、何となく気持ち悪い。いつもならば夏を迎えれば、心地よい潮風が私たちを癒やしてくれるはずなのに。今夏の風は私たちの体を強張らせる。あの人は急に顔をしかめた。抹香に冷水をかけると、急いで踵を返してしまった。

風。私の首筋にまとわりつく風。ふと私は、3月の風について思いを巡らせた。3月の半ばに吹いた風が、私たちを引き裂いたのだ。戦慄が風とともに運ばれ、それが大地へと降り注ぐ。偶然にも私の家の方向には強い風が吹かず、見えざる汚濁物が大量に降り注ぐことはなかった。私が家に帰ることができるのは単なる偶然でしかない。帰る場所を奪われた友人と、帰る場所のある私。帰る場所を奪われるのは、あの人ではなく私だったのかもしれないのだ。灰色が滲みだした境界線の上で掌を合わせるのは、あの人ではなく私だったのかもしれない。あの日、もし強い北風が吹いたとしたら、私の人生は大きく変わっていたのだ。あの人と私を隔ててしまったものは偶然でしかないとしたら、なんと理不尽なことか！風が私たちを引き裂いた。あの人と私の間に横たわるもの。それを偶然的産物と言ってしまうにはあまりにも軽々しい。あの人と私の間に広がる絶望的な断絶。なぜ私たちは引き裂かれなければならなかったのか？私はこの断絶を受け入れたくはない。だがこの断絶は確実に此処にあるのだ。

新たな断絶が、私たちの間には作られてしまった。職業と学歴によって引き裂かれていた私たちに、放射線が追い打ちをかける。この絶望的な断絶は何時になれば埋められるのだろうか。私たちを引き裂こうとする現実を、どうすれば問いただすことができるのか。原町で生まれ育った私たちは、四分五裂にされようとしていた。そして、私たちは震災という経験によって癒し難い傷を負ってしまった。そして、この傷は冷酷な現実を浮かび上

がらせたのだ。それは過去から現在にかけて、私たちの生き方が、私たちの預かり知らない因果関係によって制限されていたという事実である。私たちは、私たちの知っている生き方にのみ、自らの生き方を重ね合わせようと試みていた。そして厄介な事に、それは疑うことすら困難な現実であるようだ。私は、私の全てをもって、この現実と向き合わねばならぬ。そして何とかして、この理不尽な世界を記述せねばならぬ。